



**Data**

監督・脚本: アッシュ・メイフェア  
 出演: トラン・ヌー・イエン・ケー  
 /グエン・フオン・チャー・  
 ミー/マイ・トゥー・フオン  
 /グエン・ニュー・クイン/  
 レ・ヴー・ロン/グエン・タ  
 イン・タム/ラム・タイン・  
 ミー/マイ・カット・ヴィ/  
 ブイ・チュン・アイン/ファ  
 ム・ティ・キム・ガン

## 👁️👁️ みどころ

イスラム圏では今でも一夫多妻制だが、つい最近まで、それは日本でも中国でも、そしてベトナムでも！

張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『紅夢』（91年）では、鞏俐（コン・リー）扮する第四夫人がとんでもない事件を起こしたが、本作で第三夫人として嫁いできた14歳のヒロインは？

美しい風景の中から紡ぎ出される幻想的な物語は、今ドキの説明過剰な邦画とは大違いの魅力でいっぱい。これぞ映画！そう感じられるベトナムの若き女性監督アッシュ・メイフェアの映画作りの技量をしっかり確認したい。

さらに、冒頭とラストの対比や、長い髪を切りながら川に流していく少女の思いも、しっかり味わいたい。



## ■□■ベトナムにも「第三夫人」が！しかも14歳！■□■

張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『紅いコーリャン』（87年）を観た時は大きな衝撃を受けた（『シネマ5』72頁）が、続いて『紅夢』（91年）をDVDで観た時も同じような衝撃を受けた。日本でも一夫多妻制や妾制度は長い間続いていたし、家制度や長子相続制度もそれとセットで長い間続いていた。したがって、由緒ある家の、甲斐性ある男は、一夫多妻は当たり前。そして、その本妻はもちろん、側室や妾もその最大の仕事は家を承継できる可能性を持つ男の子を産むことだった。その最たるものが、徳川将軍家を存続させるための「大奥」制度で、それは映画にもされている（『シネマ13』205頁）（『シネマ25』未掲載）。

そんな大規模な大奥制度は日本に1つしかなかったが、家制度、長子相続制度、そして

一夫多妻制はチャン・イーモウの『紅夢』が描いた中国のみならず、ベトナムにも！しかも、これは本作を監督した女性アッシュ・メイフェア自身の曾祖母の体験をもとにしているそうだからビックリ。

時代は19世紀。舞台は北ベトナムの秘境。冒頭は私が2004年の中国旅行で体験した漓江下りのような、美しい渓谷を流れる川を上ってくる舟の風景から始まる。花であしらわれた手ごぎの小さな舟に乗っているのは、14歳のまだあどけない少女メイ（マイ・トゥー・フォン）だ。彼女は絹の産地であるこの地を治める大地主ハン（レ・ヴェー・ロン）のもとに第三夫人として嫁いできたそうだが、それは一体なぜ？『紅夢』では、鞏俐（コン・リー）扮する、第四夫人として嫁いできた頗蓮（スンリエン）が4人の夫人たちの嫉妬争いの中で、あっと驚く「ある事件」を起こしたが、さて本作は？

## ■美しい世界遺産の風景と幻想的な映像にうっとり！■

近時の邦画は何でも説明調で、美しい風景や幻想的な映像だけでストーリーを引っ張っていく手法は激減している。また、大型スクリーンもテレビ画面を拡大しただけのもので、明るく美しいのはいいのだが、カメラ撮影上の工夫はなく、極端なクローズアップも少ないから、インパクトのない映像ばかりになっている。それに比べると、張藝謀監督の『紅夢』（91年）は？そしてまた、ベトナムの新進女性監督アッシュ・メイフェアの本作は？

本作は、冒頭の美しい小舟による川のぼりの風景だけでスクリーン上に引き込まれるが、これは一体どこ？これが、ベトナムの首都ハノイから南へ約90キロ下ったニンビン省にあるチャンアンだと知ってビックリ！ここは、奇岩が連なる断崖絶壁の山々とその麓を流れる川や湿原が織りなす景観で、鍾乳石が垂れ下がる神秘的な洞窟などが近年注目を集め、その絶景を求めて世界中から観光客が押し寄せているようだ。そして、2014年にはチャンアンを含むベトナム北部・ニンビンの一部エリアが、文化遺産と自然遺産の双方を兼ね備える「世界複合遺産」として登録されたことでも有名だそう。中国旅行には約20回も行ったが、ベトナム旅行にはまだ一度も行ったことのない私は、本作を見て俄然ベトナム旅行を渴望することに・・・。

チャンアンは「絹の里」だから繭の製造が行われているのは当然だが、その手法は？

やさしく流れる川辺に女たちが足を浸す風景も美しいが、アッシュ・メイフェア監督がスクリーン上に見せる風景描写の映像技術は巧みだから、スクリーン上で次々と展開される北ベトナムの都市チャンアンの美しい風景とその幻想的な映像に私はただただうっとり！これが、あの「ベトナム戦争」で長年苦しんだ北ベトナムの都市とは思えないほどの美しさだ。

## ■夫人たちの力関係は？メイの妊娠は？■

『紅夢』では、今夜をどの妾の家で過ごすかを決めた主人は、その家の前に紅い提灯を

灯すことによってその意思を示していた。また、その日その妾は足マッサージを受け、食事を決定することができ、下僕たちの尊敬と服従を得ることができていた。第四夫人として嫁いできたスリエンは、当初その足マッサージに満足するとともに主人との楽しい夜にも十分満足していたが、それが長続きせず、別の夫人の前の紅い提灯の明かりが増え始めると・・・？

本作の特徴の1つは前述した風景の美しさだが、他方で、メイをはじめとする女たちの美しさを際立たせるアッシュ・メイフェア監督の撮影技術にも目を奪われる。本作の原題は『The Third Wife』だが、邦題を『第三夫人と髪飾り』としたことの意味がはっきりわかるのは、第二夫人が14歳のメイに性の手ほどき(?)をするシーン。第二夫人が女の身体のしくみや性のよこびのしくみを教えるのに使ったのが髪飾りだが、アッシュ・メイフェア監督はそんなシークエンスを本作でいかに美しく撮っているのか？かつての日活ロマンポルノ全盛時代、多くの若手監督はそんなシーンの撮影に工夫を凝らしたはずだ。

そんな性の手ほどき(?)を受けたメイはしっかり初夜の儀式を済ませた上、早々に妊娠したから、主人をはじめ家中が大喜び！もっとも、第一夫人には既に成人した男の子ソン(ゲン・タイン・タム)がいたが、第二夫人には3人の女の子しかいなかったから、そんな中でメイがもし男の子を生んだら・・・？

## ■官能の世界は？男女の性愛の混乱ぶりは？■

日活ロマンポルノでは、官能の世界をいかにスクリーン上に魅せるかがポイントだったが、本作にはそんな要請はない。しかし、メイフェア監督は、19世紀のベトナムにおける「大奥」の世界にも、官能の世界や男女の性愛の混乱ぶりをスクリーン上に描くことが不可欠と考えたらしい。そして、その役割を3人の中で最も美人で官能的な第二夫人に担わせた。ある晩、用を足すため寝室を出たメイは、第二夫人が屋敷の外に出て行くのを目撃したため、後をつけていくと・・・？

「密通」とか「不義密通」とかの言葉は、日本でも徳川時代によく登場していたが、それは19世紀のベトナムにもあったらしい。しかして、第二夫人の密通相手は何と第一夫人の一人息子ソンだったから、ビックリ。これでは不義密通の上に、近親相姦のおまけつきだ。そんな罪が露見した場合、その罰は？私にはその罰の軽さが意外だったが、この波紋は家全体にどのように広がっていくの・・・？

## ■第1の悲劇は？男児を産むというお仕事は？■

私が近時ハマっているいくつかの「華流ドラマ」では、宮廷における皇族たちの権力争いと、女たちの嫉妬争いがポイントだが、新たに第三夫人を迎えた大地主宅でも、妊娠したメイが「男の子を産みたい」と願い始めた頃から、3人の夫人たちの間に少しずつ波紋

が……。もともと、当初のそれは、第一夫人も妊娠したことを知ったメイが、「自分のお腹の子が男の子でありますように」と神様に祈っただけのことだが、それは何を意味していたの？

そんな中で起きたのが第1の悲劇、つまり、第一夫人が突然流産してしまったことだ。この流産は自分が男児の誕生を神に祈ったせいだ。そう考えたメイの頭の中が少し混乱したのは仕方ない。しかして、あの時に髪飾りを使って性の手ほどきをしたのと同じように、今、そんなメイを優しく慰めたのも第二夫人。そんな優しさに触れて、感情が高ぶったメイは、思わずそこで第二夫人の唇を求めたが……。

## ■□■第2の悲劇は？なぜ自殺を？メイの出産は？■□■

『紅夢』の悲劇は殺人を伴う重大な犯罪行為から起きたが、本作に見る第2の悲劇は、ソンの意に沿わない結婚話から起きていく。結婚は一夫一婦制、そして、その選択は男女の自由な意思に基づくもの。したがって、いくら両親でも息子や娘の意に沿わない結婚の押し付けはできないもの。21世紀の今ではそれが常識だが、そんな考えが生まれ、定着したのはここ100年のことに過ぎない。江戸時代はもちろん、明治の近代国家になった日本でも、そして戦前の日本でも、自由な男女の意志に基づく結婚などありえなかった。そして、それは19世紀のベトナムでも同じだ。

いくら美人で魅力的であっても、第一夫人の一人息子であるソンが第二夫人にホレるのとはご法度。ところが、その不義密通がバレて処罰を受けても、なおソンは第二夫人への思いを断ち切れなかったらしい。その辛い心情を打ち明けるソンに対して、使用人のラオ（グエン・ニュー・クイン）は自身の悲恋を打ち明けて慰めたが……？

そんなソンは当然結婚適齢期だから、息子の嫁を決める権利を持つ父親（大地主）が選んだ嫁はトゥエット（ファム・ティ・キム・ガン）という美しい娘だ。しかし、今なお第二夫人への思いを断ち切れないソンは激しくその結婚を拒否したから、そんな場合、実家を離れてソンの元に嫁いできたトゥエットの立場はどうなるの？そこから生まれる第2の悲劇は何ともいたたまれないものだが、本作ではそれをしっかりと確認したい。そして、そんな悲劇の中、第一夫人の機転のおかげで何とか女の子を出産したメイの心境は？

本作冒頭は、美しい溪谷を流れる川を小舟に乗った花嫁姿のメイが上ってくるものだが、ラストは逆に、トゥエットの遺体を乗せた船が川を下っていくもの。この船をメイは一体どんな思いで見つめているのだろうか。さらに、第二夫人の次女ニャン（マイ・カット・ヴィ）は日ごろから「男になりたい」と言っていたが、それは一体なぜ？そして今、ニャンは自らの長い髪を切っては水に流していたが、この行為は一体何を意味するの？近時の、あまりにも説明調が目立つ邦画の対極に位置する、本作ラストの美しい風景と心情豊かなさまざまな思いをじっくりと味わいたい。そして、メイフェア監督の次回作に大いに期待！

2019（令和元）年11月29日記